

# オウム事件の社会学的一考察

寺 林 脩

1.	はじめに	3
2.	オウム事件とオウム真理教	4
3.	宗教類型と宗教意識	9
4.	戦後日本社会の宗教現象	11
5.	現代日本社会の宗教状況	15
6.	新新宗教とカルト	20
7.	若者世代の展開	23
8.	新人類とおたく	26
9.	教祖麻原と幹部信者	28
10.	オウム真理教とサブカルチャー	30
11.	おわりに	32

## 1. はじめに

社会にとっての非常に大きな事件の真相と本質について、月日の経過とともに不明確になっていくことは避けられない一方、徐々に明らかになっていくこともある。事件の当事者たちが事件について冷静に語り始めることによって。

2006年9月15日、オウム真理教の教祖であった麻原彰晃(本名、松本智津夫)の死刑が確定した。オウム真理教によって惹き起こされた数々の犯罪、いわゆるオウム事件の首謀者である麻原彰晃は、初公判(1996年4月)から約10年、裁判で真相を語ることはほとんどなかった。予想されたことではあるが、多くの被害者をだした事件の真相がすべて解明されることはないだろう。

しかし、今日までの裁判の過程で、事件に関わった多くの幹部信者の証言から事件の全体像はほぼ明らかになった<sup>1</sup>。また、幹部信者の手記などから、数々の犯罪における彼らの意識や行動もかなり分かってきた。最高幹部のひとりであった林郁夫の『オウムと私<sup>2</sup>』と、早川紀代秀の『私にとってオウムとは何だったのか<sup>3</sup>』はその重要な証言である。また、幹部信者と同様に教祖麻原を信じていた、あるいは信じている信者たちへのインタビューをまとめた、村上春樹の『約束された場所で<sup>4</sup>』や、映画監督の森達也のドキュメンタリー『A』『A2』における信者たちの言葉も、オウム真理教を知る大きな手がかりとなる。

この小論はオウム事件の宗教社会学的考察である。宗教社会学的考察とは、宗教現象と社会変動の関係や、宗教現象と政治や経済、文化などの他の社会諸現象との関係の考察である。また、宗教教団の教義や組織や活動の考察、人々の宗教意識の考察などである。この小論では、これらすべての多面的なアプローチによってオウム事件を考察する。

## 2. オウム事件とオウム真理教

1989年頃から1995年にかけて、オウム真理教によって数々の犯罪が行われた。主なものに、田口修二リンチ殺害事件(1989年2月頃)、坂本堤弁護士一家殺害事件(1989年11月4日)、森林法・国土法違反で熊本県が告発(1990年8月16日)、後に有罪判決、池田大作創価学会名誉会長襲撃未遂事件(1993年11月下旬頃・12月18日)、落田耕太郎リンチ殺害事件(1994年1月30日)、滝本太郎弁護士サリン殺人未遂事件(1994年5月9日)、松本サリン事件(1994年6月27日)、富田俊男リンチ殺害事件(1994年7月10日)、水野昇V Xガス殺人未遂事件(1994年12月2日)、濱口忠仁V Xガス殺人事件(1994年12月12日)、永岡弘行「オウム真理教被害者の会」会長V Xガス殺人未遂事件(1995年1月4日)、仮谷清志拉致殺害事件(1995年2月28日)、地下鉄サリン事件(1995年3月20日)、新宿青酸ガス事件(1995年5月5日)、東京都庁爆弾郵便事件(1995年5月16日)などがある。また、数名の信者の修行中の死亡や、サリンやV Xガスなどの有毒ガスや銃器の製造の他、数々の不法行為を重ねていた。死者は30名を超え、被害者はサリン事件などによって5千名にも及ぶ。

犯罪的行為に関わった幹部信者の多くは裁判で有罪判決を受け、多くのものは既に刑期を終えている。まだ刑の確定していないものも多く、その中で13人には死刑判決がでている。裁判は今日なお継続中である。

さて、オウム真理教はどのような宗教か。教祖麻原彰晃は1984年に東京都渋谷区にヨーガ道場を開く。同年、(株)オウムの設立を登記する。1986年、「オウム神仙の会」を設立。1987年、「オウム真理教」に改称する。1989年、宗教法人の認証を得る。麻原34歳の時である。

彼が教祖になるまでの経緯については、眼の傷害のため地元熊本県の盲学校

を卒業後、熊本県や鹿児島県で鍼灸・マッサージ師として働く。1975年、20歳のことである。その後、1978年に千葉県船橋市で鍼灸院を開業する。しかし、1982年にニセ薬の製造・販売で薬事法違反に問われ、東京簡易裁判所で20万円の罰金刑を受けている。そして、ヨーガの指導者から宗教の教祖へ転身する。

オウムとはサンスクリット語omの音写である。呪文の始めに用いられた祈禱語で、「聖なる」を意味する。教義の特徴は、シヴァ神を主神とし、ヨーガ、ヒンドゥー教、原始仏教、チベット密教を土台にする。ハルマゲドン（世界最終戦争）や終末思想、ニューエイジ思想、陰謀論（フリーメイソンやアメリカによる世界制覇）、SFアニメなどを取り込んだ折衷主義である<sup>5</sup>。瞑想や呼吸法による修行やワーク（奉仕作業、毒ガスや銃の製造）の実践を信者に課す。そして、信者は教祖麻原による認証によって解脱への段階を進む。

オウム真理教の解脱とは、身体的・生理的限界状況において自らの身体感覚を無化して、真理の体現者で人類の救済者、最終解脱者である教祖麻原と一体化することである。教祖麻原の境地に達することである。それは一種の脳内現象（ホルモンの作用による）を惹き起こすことであると思われる。身体感覚の無化は一時のことであり、解脱に精神性はない。オウム真理教における解脱と救済は、教祖麻原によってさまざまな文脈において語られる。

神秘体験の多くは変性意識状態（仮想世界に臨場感のもてる状態）に対する文化的解釈の所産であるといえる。身体的・生理的な過度の消耗や刺激による、意識の低下もしくは高揚した状態において、日常的経験を超えた意識状態が生じることがある。それを神がかりや憑依、脱魂などということもある。オウム真理教における激しい修行や瞑想において生じた変性意識状態を、教祖麻原は宗教的・神秘的体験であると信者に教え、解脱への段階であると信じさせていた。

オウム真理教におけるイニシエーション（入会、入信、儀礼、奥義の伝授）は、教祖麻原との身体的コミュニケーションを意味する。額から教祖の霊的エネルギー

## 6 オウム事件の社会学的一考察(寺林)

ギーを注ぎ込むシャクティパットや、教祖の脳波をコピーするためのヘッドギアの装着(パーフェクト・サーベーション・イニシエーション)や、教祖の風呂の湯や血液や(血のイニシエーション)、髪の毛を煎じて飲むことや、教祖のDNAを培養した溶液を飲むこと(DNAイニシエーション)に象徴されるように、教祖麻原から直接的に霊的エネルギーを授けてもらって内面化された教祖麻原のイメージに依拠して、瞑想修行ではひたすら教祖麻原をイメージすることである。このようなイニシエーションや修行を繰り返すことで、解脱することができ超能力も得られる。まさしく教祖麻原のクローン化を実践していた。教祖麻原との一体化はオウム真理教において文字どおり一体化であった。また、瞑想修行においては常に教祖麻原はアストラル(この世と次元を異にする世界)で信者を見守っていると信じられており、信者はそうした絶大なる影響下にあった。心の中まで見透かされ、管理されて一元的支配下に入るということでもある。

若者の超能力や神秘体験の希求に対して、オウム真理教では身体の局所性を克服する志向の展開としての修行が、ヨーガなどを取り入れて実に巧妙にプログラム化されている。身体の局所性が克服されない日常的自我に囚われている有様を理解することが悟りであり、局所性が突破されると解脱であるという。オウム真理教では霊的に覚醒した人間こそ真の人間であるという。そこで、ヨーガによる身体の局所性の打破として、体内の霊的エネルギーを呼び覚ますクンダリーナの覚醒(神秘的な心身の変容の実感である。7つのチャクラという霊的中枢のひとつが尾髄骨にあり、そこから頭頂に突き抜けるエネルギーを実感すること)を目指すことが修行の当面の目標であり、解脱の必須条件である。信者は自分の体に起きた異変を教祖麻原の霊的エネルギーによるものであり、得がたい宗教的体験であると信じる。教祖麻原こそ解脱に導いてくれる真の解脱者であると確信する。

解脱と救済の行程としては、小乗(ヒナヤーナ)、大乘(マハーヤーナ)、秘

密金剛乗（タントラ・ヴァジラヤーナ）を説いた。オウム真理教での小乗は煩惱に囚われた無明の闇の中にいる自分自身を救済することであり、大乘は人々を無差別に救済することであり、秘密金剛乗は救済可能な者を選別して救済することである。秘密金剛乗は、後にオウム真理教が裏のワークとして武装化を進め最終的に無差別殺人から国家転覆を目指す行動原理として、教祖麻原が幹部信者に浸透させていった教義である。<sup>6</sup>

オウム真理教では解脱と救済をつなぐ論理が次第に変化していく。教祖麻原のように心が自在で、すべての人々の前世来世（輪廻転生）を見通し見切ることのできるものが最終的解脱であり、人々を解脱に導くことが救済であった。後には解脱できぬ人間を見抜き悪行を積ませぬように転生させることが救済になる。さらに、オウム真理教に敵対する人々や組織、国家との戦いが大いなる救済事業となる。

1989年頃から、修行内容に対する週刊誌などマスコミのバッシングが強まる。また、信者家族やその支援者による被害者の会とのトラブルが多発する。さらに、政界への進出を企てた1990年の衆議院選挙で候補者全員が落選すると、現世否定的傾向と終末思想を強める。ヨハネの黙示録やノストラダムスの予言を独自に解釈して、1997年のハルマゲドンやその後の世界核戦争を予言して信者の危機感を煽る。超能力者で救世主、人々の業（カルマ）を背負う犠牲者としての教祖の絶対性をますます強調するようになる。

当初の終末回避の教えが後退して、人々を高い次元に転生させる、殺人を許容するポアの教えを説き、世界の破滅予言を繰り返す。また、教祖麻原の命令に絶対的に服従する教え、マハームドラー（「大いなる空」の意味。オウム真理教では教祖麻原が信者のカルマを解消する「グルのしかけ」と考えられていた）を幹部信者らが実践する。それは無理難題を強いることで、教祖への忠誠を確認することである。マハームドラーを実践しないことは利己的の觀念に囚われて

おり、教祖麻原を裏切ることであり、教祖麻原によってポアされることを意味している。教祖麻原に対する絶対的帰依と死に対する恐怖心によって、マハームドラーを実践するしかなく、最終的には命じられるままに、幹部信者が無差別テロを惹き起こすことになる。さらに、教団内の結束を強めるために、外部からの毒ガス攻撃を捏造し批判することで、社会に対する反感憎悪を増大させて攻撃性を惹き起し反社会性を強める。幹部信者たちは教団内の出世競争によっても煽られ、教団内外の暴力行為を激化させていく。その行き着く先が地下鉄サリン事件であった。

1990年代に入ってから教祖麻原にとって、救済とは武装化の実行であり、宗教はその実行のカモフラージュにすぎなかったと思われる。1990年の石垣島セミナーはボツリヌストキシンばらまきのカモフラージュであり、1993年のカーラチャクラ・タントラ成就式典は炭疽菌ばらまきのカモフラージュであり、1994年の省庁制発足の祝宴は松本サリン事件のカモフラージュであった。そもそも1990年の当初に3万人の解脱者をだして戦い（オウム真理教に敵対する組織や国家との戦いや、ハルマゲドン）を回避するといっていたことも、教祖麻原の本音は戦いのための戦士を作ることであったと思われる。他方、一部幹部信者によって、秘密裏に銃器などの兵器製造とサリンプラント建設が進められていく。

オウム真理教のようなカルト集団の場合は、絶対的宗教的指導者である教祖と幹部信者は一対一の全面的支配服従関係にある。それ以外の信者間の親密な人間関係は禁じられている。幹部信者は個々人が教祖に認められるためにその忠誠を競いあった。犯罪行為は幹部信者の協力によるが、基本的には教祖の指示を受けての積極的自己表現である。教祖に認められてステージが向上し、自分が解脱できるための。「ヴァジラヤーナ」と「マハームドラー」の教えによって、教祖麻原の宗教性が全く疑われることなく、教祖麻原にとっては何でもありの世界ができあがっていく。



### 3. 宗教類型と宗教意識

オウム真理教によるオウム事件をどのように解明すればよいのか。そこで注目すべきは2つの側面である。オウム真理教は宗教教団であり、1970年代末から1980年代にかけて誕生して教勢を拡大した「新新宗教」といわれる、カルト性の強い宗教である。したがって、戦後日本社会の宗教現象を分析し、オウム真理教の形成過程をその中で位置づけることが求められる。第一の側面のキーワードは「宗教」、「新新宗教」、「カルト」である。

1995年の地下鉄サリン事件の時、出家信者の平均年齢は20代後半である。幹部信者の多くは30代前半である。彼らの青春時代は1980年代であり、その世代の若者は「新人類」と呼ばれていた。その世代の中から1980年代後半に「おたく」が登場する。第二の側面のキーワードは「若者」、「新人類」、「おたく」である。この点については後半で述べる。

1980年代後半にオウム真理教が誕生し、若者を中心に多くの信者を獲得し、1990年代に過激なカルトに変貌していったのはなぜか。日本の宗教類型や日本人の宗教意識から分析を始めなければならない。日本の宗教を4つの類型に分けて考えれば、戦後日本社会の宗教現象を捉えやすい。それは旧宗教、古宗教、新宗教、新新宗教の4類型である。日本の宗教はいつの時代も習合的（シンクレティズム）な状態で存在してきたことはいうまでもない。

旧宗教は伝統的、制度的宗教である。主に奈良・平安・鎌倉仏教である。仏陀・釈尊の教えに帰依し、安心立命を念じる。主に彼岸志向的な解脱的救済観を共有している。経典に学び、人間と人生の真理を悟ることを目指す、いわゆる諦念系の宗教である。寺院への参拝や読経、写経など自己修養的な宗教行動に特徴がある。

古宗教は民間信仰や民俗宗教、民族宗教などである。古くから人々に受け継がれてきたそれぞれの地方の宗教で、代表的なものは神道である。産土神（土地のまもり神）、豊作の神、安産の神、学問の神など。通過儀礼や農耕儀礼などの年中行事に関わる。特定の教祖をもたず、教義の体系化や教団の組織化が不完全な自然発生的宗教である。一般民衆のさまざまな悩みに対応してきたアニミズム系やシャーマニズム系の宗教である。

新宗教は結社の、組織的な宗教である。主に現世志向的な「生命主義的救済観」<sup>7</sup>を共有している。宇宙の万物を生み生かしている根源的生命との調和的關係が得られれば、人間生命の全面的な開花と拡充は実現される。教祖は神がかりや神秘的合一などの宗教的体験を通しての、根源的生命の体现者であり、人々の救済のための神意の啓示者である。根源的生命と一体化できれば貧病争（貧しさや病気や争いごと）から解放されて心直し、世直しに導かれる。信じる者は救われる、いわゆる信心系の宗教である。現世利益的な宗教行動が中心である。

新新宗教は呪術色の濃い神秘主義的な宗教である。現世肯定的な自由参加型から、現世否定的な教団埋没型まで多様な宗教である。信者たちの求めに応じてさまざまな救済財が提供される。信心系の宗教や、人々を救済するために多様な技法が用いられる霊・術系の宗教である。1970年代末から1980年代にかけて誕生した宗教、あるいはこの頃に教勢を著しく拡大した宗教である。オウム真理教はその代表的教団である。

日本人の宗教意識については、次の4つに分けて捉えることができる。おかげ意識（原恩意識）、たたり意識（原罪意識）、現世利益、祖先崇拜である。おかげ意識とは、何事もなく生きているのは神や仏、お天道様のおかげであるという意識である。生かされていることの感謝の気持ちである。たたり意識とは、わが身や家族に降りかかる不幸や不運、貧病争の原因は、悪霊や怨霊、不浄霊のたたりであるという意識である。水子供養はたたり意識による典型的なもの

である。現世利益はこの世で神仏の功德によって授かる利益や恩恵を祈願し期待することである。無病息災や商売繁盛、家内安全、合格祈願などがある。祖先崇拜は祖先に対する慰霊的感情と、今ある自分や家族一族の祖先に対する感謝の念である。また、同時に子孫への加護を祈願し期待することである。

以上の4つの宗教意識のアマルガムが一般の人々の宗教意識を構成している。先の4つの宗教類型それぞれに宗教意識のすべては含まれているが、若干の棲み分けも行われている。旧宗教ではおかげ意識と祖先崇拜にウエイトがあり、古宗教にはあたり意識と現世利益にウエイトがある。また、新宗教は現世利益にウエイトがあるものが多い。新新宗教にはあたり意識や現世利益の他に、自己能力開発的な要素や超能力希求的な要素の加味されたものが多い。

#### 4. 戦後日本社会の宗教現象

オウム真理教が誕生した1980年代後半には、多くの若者を中心とした信者を獲得する歴史的、社会構造的状況が形成されていたことに注目しなければならない。そこで戦後日本社会の宗教現象をたどる。先に論じた宗教類型と宗教意識が手がかりになる。

まずは宗教意識調査に注目したい。戦後60年間の一般的傾向は、世俗化である。宗教を自覚的に信仰しているとする人々の割合や、宗教が幸せな生活を送るうえで大切であると思う人々の割合は、すべての世代で減少傾向にある。新聞社や研究機関の意識調査がそれを示している。最初に取り上げるのは、長期に亘って、日本人の宗教意識(20数項目)に絞って調査してきた読売新聞社の調査である。<sup>8</sup>最も信頼できるものである。

1952年調査、「あなた自身の信じている宗教は何ですか」に対して、仏教は54.4%。その他の宗教が10.3%である。1965年調査、「神様でも仏様でも何か信心を

なさっていますか」に対して、「信心している」は56.0%である。1969年調査、「あなたは宗教を信じていますか」に対して、「信じている」は35.8%である。1979年調査から同一形式になり、「あなたは、何か宗教を信じていますか」に対して、「信じている」が33.6%。1984年、29.1%。1989年、28.0%。1994年、26.1%。1998年、20.5%。2000年、22.8%。2001年、21.5%。2005年、22.9%である。

また、「現在、あなたが幸せな生活を送る上で、宗教は大切であると思いますか。そう思いませんか」に対して、「大切である」と答えたものは、1979年調査で、46.2%。1984年、43.8%。1989年、38.0%。1994年、34.2%。1998年、27.0%。2000年、30.7%。2001年、33.6%。2005年、35.3%である。

朝日新聞社の1981年世論調査「宗教心と日本人」によると、「家の宗教は別として、いま、あなたが信仰している宗教がありますか。神道、仏教、キリスト教、それ以外の宗教に分けるとどの宗教に入らっしゃるか」に対して、「仏教系」27%、「神道系」4%、「神仏両方」2%、「キリスト教系」2%、「それ以外の宗教」1%、「信仰する宗教なし」62%、「その他・答えない」2%である。1995年「全国世論調査」では、「仏教系」26%、「神道系」2%、「神仏両方」1%、「キリスト教系」1%、「それ以外の宗教」2%、「信仰する宗教なし」63%、「その他・答えない」5%である。<sup>9</sup>

日本世論調査会の1995年「宗教世論調査」によると、「あなたは、宗教を信仰していますか」に対して、「熱心に信仰している」8.9%、「信仰しているが、あまり熱心ではない」32.6%、「かつては信仰したことがある」3.1%、「信仰したことはない」54.1%、「分からない・無回答」1.3%である。<sup>10</sup>また、國學院大學21世紀COEプログラム2004年「日本人の宗教団体への関与・認知・評価に関する世論調査」によると、「あなたは何か、信仰とか信心とかを持っていますか」に対して、「持っている」27.2%、「持っていない」72.3%である。<sup>11</sup>現代の日本

人で自覚的にある宗教を信仰している人は、いろいろな意識調査を総合的にみて30%弱というところである。20歳代では10%前後である。オウム真理教による地下鉄サリン事件後の1995年頃に、日本人の宗教離れ、宗教教団離れは加速したが、2000年以降はその反動で若干ではあるが宗教回帰している。

大きく見れば、戦後日本社会の一層の近代化・合理化によって宗教の社会的機能は衰退傾向にある。反面、宗教の個人主義化、内面倫理化、私事化は進行している。他方、時として政治的・経済的不満や近代化・合理化の反動としての宗教現象のリバイバル現象や宗教ブーム現象が生じる。それは宗教意識調査に現れないが、新宗教や新新宗教の多くの教団の誕生や教勢拡大が社会問題化することによって示される。

終戦直後の日本社会では、旧宗教と古宗教の2種類の宗教が戦時下の国家神道体制に順応して大きなダメージを受けずにその存在感を保っていた。明治時代から大正、昭和時代の始めに庶民の積極的信仰を集めていた新宗教の多くは、戦時下の国家神道体制において政府によって厳しく管理されたり弾圧されたりして弱体化していた。新宗教は戦後再出発することになる。

1950年代から1960年代にかけて、新宗教による宗教ブームが起こる。戦後の混乱期から復興期を経て、激動の時代、高度経済成長の時代を迎える。旧宗教はそれぞれに教義と組織の近代化を図るが、貧病争に直面している人々の宗教的欲求に対応できなかったところを、新宗教がみごとに現世利益的救済財を提供する。とくに地方から都市に流入した若い勤労者を巧みに組織化することによって、新宗教は飛躍的に隆盛した。大衆社会状況下での都市化や核家族化、また、地域共同体の解体などによって伝統的宗教や生活から切り離された人々に新たな精神的支えを提供したのである。新宗教は戦後の混乱期以来、女性差別の継続など社会の歪みの犠牲者であった中高年の女性にも多くの信者を獲得した。若者や女性の寂しさや悩みに的確に対応していく。

新宗教の代表例は、創価学会、立正佼成会、霊友会、生長の家、天照皇大神宮教、世界救世教、PL教団などである。主に信心系の宗教であるが、法華経系の場合は心直しから世直しを志向する実践性をあわせもっている。

1970年代に入ると、新宗教の強引な布教活動に対して社会からの批判が高まる。新宗教自体も自己反省的に教義の体系化と合理化を行い、さらに安定した組織運営を心がけるようになる。つまり社会への適応をはかることによって既成宗教化していく。

1973年のオイルショックや円ドル固定レートから変動相場制によって、日本社会は産業構造や社会構造の転換を迫られる。1974年には経済成長率が戦後初のマイナスとなり高度経済成長は終焉する。新たな低成長の時代を迎えることになった。また、1972年の田中角栄内閣の成立と1976年のロッキード事件逮捕後の閣將軍ぶりは、55年体制を崩壊させ、政治の保守化を加速させる。このような経済的、政治的閉塞状況を背景にして、また、環境問題から派生したエコロジカルな世界観や反科学主義の時代的ムードを背景にして、さらに、オカルトブームなどの若者のサブカルチャーを背景にして、呪術的、神秘的な救済財を提供する霊・術系の新新宗教が多く誕生し教勢を拡大していく。

代表的な新新宗教は、真如苑、阿含宗、崇教真光、神霊教、大山祇命神示教会、霊波之光教会、GLA総合本部、神慈秀明会、幸福の科学、オウム真理教などである。1950年代から1960年代にかけての宗教ブームでは新宗教への入信動機は貧病争であった。しかし、1970年代末から1980年代の宗教ブームでは、超能力や神秘体験への志向、また日常生活では得られない親身な触れ合いや共同性、生きがいを希求しての入信動機が目立つようになる。とくに若者においてはスピリチュアル（心霊的、神霊的）なものを渴望する傾向が強い。このようなニーズに応える宗教が新新宗教だったのである。

1950年代から1960年代の宗教ブームが提供した新宗教の現世利益は、高度経

済成長時代の大衆社会状況の生み出したものである。他方、1970年代末から1980年代の宗教ブームが提供した、新新宗教の超能力や神秘体験、親身な触れ合いや共同性、生きがいやスピリチュアルなもの、つまり現世離脱や超越世界志向は、低成長時代に進んだ効率優先の管理社会や消費社会、情報化社会の生み出したものである。時代社会的に新宗教も新新宗教も流行るべくして流行ったのである。

## 5. 現代日本社会の宗教状況

宗教教団への一般的な入信動機である貧病争とは無縁の、名門大学出身の前途有望な若者が、とくに学業において優秀で高度な科学的知識を身につけた理系の若者が、オウム真理教に関心を寄せ、人生を託するに足るとはとうてい思えない教義を信じ、無差別テロを惹き起こす。そうした若者を生み育ててきた日本社会とはどのような社会なのか。そして、オウム真理教の暴走を許してしまった日本社会とは。問われねばならないのは現代日本社会の宗教状況である。

戦後の宗教状況について、宗教学者の山折哲雄は戦前の宗教政策の影響を指摘している。それは戦前において仏教の無力化、神道の非宗教化、知識人の無神論化を結果し、その影響が今日にも及んでいると。<sup>12</sup>

仏教は江戸幕藩体制下において、本末制度や寺檀制度、寺請制度によって政治的・社会的秩序の維持機能を果たし、葬送と祖先崇拝によって経済的安定を得ていた。とはいえ、国教的地位としては脆弱で、民衆レベルでは仏教と神道、民間信仰が並存していた。切支丹禁圧を除けば、幕府の宗教政策は宗教的多元主義を許す消極的抑制主義である。全般的には活発な布教活動などの宗教活動は抑圧されていた。新しい寺院建設や新しい教義、儀礼は許されなかった。さらに、明治維新期の神道国教化政策における廃仏毀釈のダメージは大きく、山

折哲雄のいう仏教の無力化は戦後まで引きずることになる。つまり、仏教の思想的理解は人々に広まらず、葬式仏教としてのイメージが人々に焼きついてしまう。

明治維新政府は、近代的国家統一の精神的支柱を形成するために、天皇を頂点とする祭政一致の神道国教化政策を推進する。つまり「近代天皇制国家の宗教政策は、国家神道の強制と宗教の徹底的な統制支配を基本的特徴としている。それは天皇の宗教的権威を復活するために、神仏分離を強行して全神社を国家祭祀の施設として一元的に再編成することである。……全神社の頂点には天皇の祖先神を祀る伊勢神宮を位置づけ、天皇の宗教的権威と神社神道を直結<sup>13</sup>させることが神道国教化であり、新しく作られた国家神道である。

国家神道は現代日本の宗教状況に非常に大きく影響していると考えられる。山折哲雄のいう仏教の無力化や神道の非宗教化、知識人の無神論化それらすべてを強めた原因ですらある。換言すれば、国家神道は日本人が宗教無関心を装う社会的性格を形成したと思われる。

戦後、国家神道はGHQの「神道指令」によって廃止される。戦時下において神社への参拝は皇国の臣民として強要された以上に、戦争遂行の強力な下部組織の活動として機能したため、戦後の神道のイメージダウンは決定的でさえあった。神道の非宗教化は、戦前は国策として、戦後は人々の意識の中で強く継続することになる。明治政府による神道の政策的使い分けによって、つまり宗教性と非宗教性の使い分けによって、戦後の日本人の神道に対する不信の念は強く、さらには宗教一般に対する疑惑の念を植えつけることになった。

明治維新から第二次大戦終戦までの約80年間において、仏教と神道は政府の宗教政策に翻弄されることになった。そのために中世以来、日本人の精神生活を支えていた仏教と神道の弱体化は、現代人においても影響している。象徴的には戦前においても戦後においても、知識人の宗教的コミットメントの目立た



ない社会になったことである。知識人の無神論化は現代においても顕著である。欧米の思想家とは際立った違いがある。

山折哲雄がいう知識人の無神論化は戦後の日本人一般にも敷衍できる。「海外に出る日本の知識人が、あなたの宗教は何かと問われて、さてと考えこみ、迷ったあげくに無宗教とか仏教とかと半ば自嘲気味に答える。」<sup>14</sup>山折哲雄が紹介するエピソードは知識人のみならず、日本人一般の宗教意識を象徴している。

戦前において一般民衆の宗教的要求に積極的に対応してきたのは、いわゆる教派神道13派である。また、新興の新宗教としては、幕末から明治維新时期では天理教、金光教、黒住教、丸山教などが、大正から昭和初期では大本、ほんみち、ひとのみち、戦後発展する創価学会、立正佼成会、霊友会、生長の家などが、政府による宗教統制にもめげず活動していた。しかし、それらの教団形成期は呪術的・神秘主義的で社会から淫祠邪教の烙印を押されつづけた。信教の自由が確立した今日においても、知識人が宗教を敬遠するもうひとつの原因に新宗教の戦前のイメージがある。

オウム真理教による数々の犯罪が明らかになった頃、日本の戦後教育を批判する論評が多く見られた。宗教や道徳の教育を疎かにしてきたことに問題があると。宗教や道徳を問題にするのであれば、先に述べた戦前の百年来の宗教政策を問わねばならない。

高等教育で宗教を知識として教えることは可能である。しかし、公教育の初等教育や中等教育において宗教や道徳を教育するためには、宗教や道徳についての成熟した社会的背景と、そうした歴史が必要である。政教分離によって、公教育では信仰者の立場から宗教を教えることはできない。公教育の宗教教育は容易ではない。道徳を背後で支えているのは宗教であるから、道徳教育も同様である。多くの現代日本人は、宗教への社会的無関心と伝統的宗教の弱体化によって、成熟した価値基準の核としての宗教倫理をもてないでいる。また、

多くの現代日本人は神仏の眼差しともいうべき心身を背後で支える精神性や霊性（人知を超えたものに対する畏怖や畏敬の念）を欠いている。

しかし、国家による宗教や道徳への介入は、宗教的なイデオロギーやナショナリズムに容易に転化しうることはいうまでもない。伝統的宗教の地道な日常的教化活動と宗教家の優れた人材の養成システムが求められる。

また、現代日本の宗教状況は、社会が宗教や宗教教団に寛容であるという特徴がある。日本の社会は宗教的対立を内包せず、宗教が政府の社会政策や地方自治を妨害することはない。科学技術を導入して、戦後の近代化・合理化を一気に押し進めることができたのも宗教的寛容に負うところが大きい。

そもそも、明治政府の西洋的近代化に対して伝統的宗教である神道や仏教は抵抗することはなかった。キリスト教的精神を背景とする西洋的近代化を積極的に受け入れることができたのも、また和魂洋才にすんなり納得するのも、近代の日本社会がすでに世俗化されていたということである。つまり伝統的宗教の社会統合的機能は既にある程度失われており、宗教的寛容は江戸時代末期以来の日本的伝統であったといえる。戦前の国家神道はその伝統ゆえに有効に強力に機能したともいえる。

ところでオウム事件を考えると、日本社会の宗教的寛容の弱点を指摘することができる。やはり仏教などの伝統的宗教が、社会のモラルの構築に関わろうとする姿勢の弱さに問題を感じる。また、政府やNGO、伝統的宗教などの連携によるカルト対策のシステムが存在せず、そのために、アメリカのサブカルチャーとしての終末観や諸々のカルトなどに無批判的で無関心で無防備な社会になっている。教育における科学的精神の陶冶は、普遍的課題であることはいうまでもない。宗教的伝統と科学的理性の統合に向けて。

宗教や道徳の教育は慎重に取り組みねばならず、指導者の教育など、非常に時間のかかる問題である。しかし、信教の自由の観点から慎重であらねばなら

ないが、カルト対策はヨーロッパなどの先進国の経験に学べば、早期に実現可能である。たとえば、1996年にEU議会は「ヨーロッパのカルトに関する決議」を採択している。また、従来からカルト対策に熱心だったフランスは、2001年にカルト団体の活動を規制した「反カルト法」を制定した。

ところで、多くの日本人が宗教に無関心であるということとはできない。先に取り上げた読売新聞社の宗教意識調査によると、「しばしば家の仏壇や神棚などに手を合わせる」人は、1979年、48.9%。1984年、50.7%。1989年、53.1%。1994年、53.2%。2000年、49.5%。2005年、54.7%である。また、「盆や彼岸などにはお墓参りをする」人は、同順に69.3% 72.4%、73.6%、72.2%、74.3%、79.1%である。「身の安全・商売繁盛・入試合格などの祈願をしに行く」人は、同じく30.7%、35.1%、34.1%、31.0%、34.1%、38.1%である。「正月に初詣に行く」人は、同じく56.0%、64.5%、64.4%、61.7%、68.9%、69.9%である。

同じく先に取り上げた朝日新聞社の1995年「全国世論調査」でも、「あなたは、この一年間、お盆やお彼岸などで、墓参りに行きましたか。行きませんでしたか」に対して、「行った」81%、「行かない」19%である。

読売新聞社の宗教意識調査における「あなたは、何か宗教を信じていますか」に対して、「信じている」人は、1979年の33.6%から2005年の22.9%へと減少傾向にあるが、墓参りや初詣などの宗教行動ではむしろ上昇傾向にある。これは現代の日本人が宗教に対して自覚的には関心を失いつつあるが、習慣や慣行としての宗教行動にはあまり意識せずに熱心に関わっていることを示している。宗教行動と生活慣行とをあまり区別することもない。このような宗教状況もカルトに無批判的であることの証左になる。集団としての宗教は弱まっているが、文化としての宗教は根強いものがある。

## 6. 新新宗教とカルト

「新新宗教」の名づけ親、宗教社会学者の西山茂は、新新宗教を5つの類型に分けている<sup>15</sup>。(1)霊交霊言型、「教祖や特定の霊能者ないし一般の信者が、何らかの反復的な霊術によって霊交または操霊し、それによって霊的メッセージを受け、病気治しなどの除災招福をはかる。」GLA系や真光系の諸教団や、真如苑、幸福の科学などがある。(2)呪力依存型、「霊交や霊言の追求に重点があるというよりも、特定の人物や小道具がもつとされる卓抜した呪力を信奉し、これに依存して除災招福をはかろうとする。」阿含宗、大山祇命神示教会、日本聖道教団などがある。(3)自力活現型、「神仏の加護や霊能者の呪力のような外部的な力に頼らず、自分の念の濁りを清浄にすることによって、自己に内在する自然の力を活かし現し、健康で希望のある感謝に満ちた日々を送る。」自然の泉などがある。(4)瞑想解脱型、「1960年代以降アメリカで台頭し、日本に渡ってきたもの、または日本国内で創設された瞑想法重視のインド系宗教が多い。ストレスの多い社会的現実からの離脱によって安らぎを得る。」ラジニーシ瞑想センター、クリシュナ意識国際協会、ニホン・メディテーションセンター、オウム真理教などがある。(5)共同生活型、「信者が外部社会から隔離された信仰共同体の中で生活するところに特徴がある。カリスマ的教祖の下で、宗教的ユートピアを目指す。」世界基督教統一神霊協会、イエスの方舟、オウム真理教などがある。

西山茂はオウム真理教を瞑想解脱型と共同生活型に分類しているが、霊交霊言型や呪力依存型、自力活現型の要素も若干含まれている。オウム真理教は生の空しさや現世離脱、超越世界志向、心身変容技法、終末的救済観を強調し、個人主義的な若者の信者が多いなど、新新宗教の典型的な教団である。とくに、共同生活という出家主義を採る集団埋没の教団であることがカルト性を強める

ことになる。

カルトは元来、何らかの体系化された礼拝儀式である。転じてある特定の人物や考え方への熱狂的な崇拜、さらにそういう熱狂者の集団を意味する。カルトという語は宗教教団に限定されずに、癒し系カルトや自己開発カルト、健康カルトなど広く用いられている。

宗教社会学では宗教教団の発展段階的類型として、カルトあるいは神秘主義、セクト、チャーチが用いられる。新しい宗教教団が形成される時は熱狂的・狂信的な性格、あるいは呪術的・神秘的性格をもつ。それをカルトあるいは神秘主義と呼ぶ。教義の体系化や教団の組織化が進み結社性が強まるとセクトと呼ぶ。その発展形態はデノミネーション（宗派）である。社会体制に組み込まれた制度的宗教教団がチャーチである。チャーチに対抗してカルトやセクトが形成される。カルトやセクトが社会的承認を得て制度化されるとチャーチになる。

日本の新宗教や新新宗教は形成期においてカルト的であった。カルトの集団の特徴は、排他性、独善性、教条主義、覇権主義、非公開主義、内輪主義、教祖の独裁体制などである。カルトはその熱狂性のために社会とのトラブルを生じやすく、反社会的な攻撃的破壊行動や集団自殺に至ることがある。現代社会は伝統のもつ拘束力が弱まり価値観が多様化しているために、カルトの活動は活性化する可能性が高い。

ところで、社会学の社会運動論や組織論の知見からすると、オウム真理教がカルトとして反社会性を強めたのはある程度必然的であったことは指摘しておかなければならない。宗教教団の活動であれ、社会運動が持続可能である条件として運動の人的および物的資源の獲得と、社会的支持と容認が必要である。カリスマ的教祖とその信奉者によって形成されたカルトが共同生活を志向する出家主義の集団埋没的教団であっても、完全な自給自足は不可能である。教団の規模を拡大し社会変革を目指そうとすれば、教団活動に積極的に参加する

人々と資金を外部から調達しなければならない。それは教団の教義を広めることと同様に重要である。

また、社会運動として成功するためには積極的参加者のみならず、間接的支援者や運動自体を許容する人々を一般社会において確保しなければならない。そのためには、社会運動の社会的意義の文化的意味づけが必要である。宗教教団の活動では教義を一般の人々にも理解可能な形で表現しなければならない。その出来、不出来に社会運動の成功が左右される。さらに、当該社会の体制からも容認されなければならない。宗教教団の場合、政治体制から許容されることは絶対的条件である。

どのような社会運動も当初は一般の人々に警戒心を惹き起こすものである。宗教教団の活動は特異的であれば非常に注目される。社会運動によって社会的トラブルが生じたり、被害を受けるものができると、マスコミが取り上げて社会問題化する。さらに警察や政治家が動き出すと、つまり体制によって摘発されると社会運動は社会を敵にまわし存続できなくなる。したがって、体制によって間接的あるいは消極的であっても許容されれば、社会運動の意義や価値を訴えることができ、人的・物的資源の獲得が容易になる。

オウム真理教の場合、人的・物的資源の獲得に決定的問題があった。教団の資金はほとんど信者の資産や労働力から調達された。しかも在家信者よりも出家信者に多くを依存していた。社会運動として組織として社会的支持を拡大できず、反社会性を強めれば、いずれ行き詰まる可能性が非常に高かったのである。

オウム真理教では、たとえば巧妙な靈感商法や一般受けする書物で広く一般の人々から多くの収益を持続的に上げていたわけではない。出家信者には資産をすべて寄付させ、高額のイニシエーション代を取り、パソコン販売では無償で出家信者を働かせるなどして、もっぱら教団内部の構成員によって資産は形

成された。そうした資金調達、教団のサリンプラント建設や武器製造などの経費に見合うものではなく、強引な出家信者の勧誘や拉致監禁にエスカレートする。とはいえ、1986年の「オウム神仙の会」から1995年の地下鉄サリン事件までの約10年間で100億を超える資金を調達していたことは、信者たちからの徹底的収奪とはいえ驚異的である。<sup>16</sup>

## 7. 若者世代の展開

戦後の若者世代を、日本社会の政治的・経済的状况に対応させて3期に分けて考察する。(1) 1960年代から1970年代始め、(2) 1970年代から1980年代始め、(3) 1980年代から1990年代始めである。それらの前後の世代は考察から除く。

戦後の経済的復興を急テンポで成し遂げた高度経済成長の時代は、政治的には60年安保から70年安保の時代でもあり、結果的に日米同盟体制が確立される。若者は保守体制に異議を申し立てる学生運動から、社会主義や大学改革を求めて運動を展開させ、世界的な学生運動とも連動して全共闘運動にエスカレートさせる。しかし、1972年の連合赤軍事件に象徴される瓦解によって学生運動は終焉する。この世代の中心にいたのは戦後生まれの団塊の世代である。

未来において現実として実現可能であるという意味において、社会主義や大学改革という理想は現実世界の一部である。1960年代から1970年代始めの若者は理想を抱きうる時代であった。また、彼らの共通体験として学生運動は生々しいものであった。東京オリンピックや新幹線、ビートルズ、フォークソング、ベトナム反戦運動など、政治・経済・社会・文化に世代的に連帯しうる共通体験は豊富であった。

1970年代の若者は先行世代の学生運動の挫折後に続くため、しらけ世代ともいわれる。社会体制の絶対的強固さを見てしまった世代である。むしろ、しら

け世代は輝かしい未来を夢見ていたのかもしれない。だからこそ、革命の幻想に生きた団塊世代を羨望し屈折したのである。他方、2度のオイルショックを潜り抜けた日本経済は世界的競争力をつけて豊かな社会を実現していく。この時代の若者をモラトリアム人間やモラトリアム世代と呼ぶ。さらに、モラトリアム人間は一般の人々にも影響して社会的性格に発展する。

モラトリアムは支払猶予の経済的用語である。大学進学率が40%を超えたこの世代の若者は、豊かな産業社会を背景にして社会人になることを急がず、学生時代の時間的自由を極力楽しもうとする。全国の大学で非常に多くの長期留年学生が確認され社会問題化する。彼らの性格的特徴や人生観にも多くの共通性が確認される。心優しく遊戯的な彼らの生き方に理解を示す若者論が大いに語られた時代でもある。団塊の世代のように声高に理想を語りはしないが、自分なりの夢を語りえた時代であった。しかし、多くの若者は相対主義的な価値観を抱くようになり社会に対する関心を失い、自己愛的傾向を強める。

1980年代に入ると、若者を取り巻く時代状況は大きく変化する。1980年と1986年の衆参同時選挙はともに自民党が圧勝し、政治の保守化はさらに進行する。1970年代の2度のオイルショックを経て効率化した日本経済は、1980年代後半には英米の保守的・新自由主義的拝金主義の影響からバブルを演出し自ら崩壊する。高度な消費社会は定着し、商品の記号化と物語化が需要を作り出す。誰もが少しは贅沢可能な豊かな社会になった。他方、人々は欲望を肥大化させるとともに不幸の不条理化に悩まされる。なぜ私だけが破産したのか。なぜ私だけが病気になったのか。なぜ私だけが不幸なのか。貧しい社会の不幸は耐えやすく、豊かな社会の小さな不幸は耐え難い。

1980年代は環境問題が論じられ、科学技術に対する信頼が揺らいだ時代でもある。1985年の日航機墜落事故、1986年のスペースシャトル事故、チェルノブイリ原発事故など。社会的には軽薄な時代というべきか。1980年から1985年に



かけて校内暴力が激化し、浮浪者が襲撃され、不登校やいじめ自殺、アイドル模倣自殺が深刻化する。少年犯罪が激増して、件数では戦後65年間で最も多い。豊かな社会の病理が一気に噴出す。

偏差値教育に象徴される選別のシステム化は、社会の管理化・効率化を貫徹させた結果である。情報化社会の到来は管理化・効率化をさらに推し進めることになる。同時に仮想現実が現実化することで、現実自体が希薄化していく。理想や夢との距離感によって現実が認識されるが、仮想現実という虚構との相対で現実を実感することは難しい。虚構の象徴であり、仮想現実を物語として徹底的に可視化・商品化した東京ディズニーランドがオープンしたのは1983年である。手ごたえのない時代に若者は社会に対するアンチテーゼを失う。

若者にとって成熟社会は面白さの欠如した社会である。何も変わらない日々が続く、不透明で輝きのない未来を生きることになる。何時までも今日が続くようにも思われ、このような現実に変化を起こさせてくれそうな、あるいはこの現実を終わらせてくれそうな感じを抱かせる点で、「オカルトブーム」、「おまじないブーム」、「新新宗教ブーム」、「自己啓発セミナーブーム」、「ヒーリングブーム」、「SFアニメブーム」、「ディスコブーム」などの若者のサブカルチャーは等価である。その中でも、世紀末を意識した破滅的物語のアニメ、コミックに若者は強く惹かれる。また、資本が参入して商業主義的に流行る。とくに、新新宗教の教祖に自らを託してしまった若者は、過剰な自己愛やプライドの高さに耐えかねて自らに絶望していたのかもしれない。何かにはまってしまったのかもしれない。

1980年代のサブカルチャーには、自分に自信をつけ、自分を健康にし、本当の自分や生きがいを見つけるという共通性がある。つまり、自分が可愛くて大切で大好きであることに疲れ果てた若者たちが、そして、なんとなく生き急ぐ真面目で幼い若者たちが、サブカルチャーの需要者であり供給者でもあった。

この1980年代の若者を新人類と呼び、その中から80年代後半におたくが登場してくる。<sup>17</sup>

## 8. 新人類とおたく

1980年代の当初には、ネアカとネクラの2類型が流行った。それは一時のことで、新人類とおたくに取って代わる。コミュニケーションスキルや対人関係の得手不得手がポイントになっていることは変わらない。

新人類は1970年代のモラトリアム人間のような社会的性格の類型とはいえない。その存在が全国の同世代の若者に数多く確認されたわけではない。しかし、情報化社会の進展にいち早く適応した親メディア性を特性として語られ始める。コンピュータはじめ、高いメディア駆使能力が特徴である。さらに、高度消費社会・情報化社会への早い適応も重なり、記号化した商品のよき消費者として、1980年代の若者を指すようになる。

親メディア性と消費性がモラトリアム人間につけ加えられ、行動が記号化したのが新人類の基本形である。記号化の典型はブランドである。DCブランドの流行は商品のもつイメージ性、つまり意味の消費であった。1980年の文藝賞作品、田中康夫の「なんとなく、クリスタル」はブランドのオンパレード作品である。

新人類の具体的イメージを定着させる意味で影響を与えたのは、『朝日ジャーナル』の筑紫哲也編集長によるインタビュー・シリーズ「新人類の旗手たち」である。1985年4月14日号から30数週間連載された。登場者は多方面で活躍するタレント（才人）たちで、1950年代後半から1960年代前半の生まれである。彼らがマスコミで取り上げられるにつれて、1980年代後半には、新人類に対する評価は向上していく。一方、同世代のおたくの方は次第にマイナスイメージで

語られるようになる。<sup>18</sup>

「おたく」という言葉は、1983年の「漫画ブリッコ」6月号で編集者中森明夫によって初めて用いられたといわれている。彼はコミックマーケットに集まるマニアたちが、お互いをおたくと呼び合う現象から彼らをおたくと名づける。新人類は対人関係や消費行動において積極的な行動派である。つまり開かれた対人コミュニケーション関係の中に自らを位置づけている。他方、おたくは対人コミュニケーション関係が苦手なタイプ、あるいは、何らかの挫折を経験したために、そこから後退してメディアの与える固有な世界（音楽、写真、アニメ、コミック、コンピュータ、無線、伝言ダイアルなど）に自らのアイデンティティを求めるといえる。

新人類とおたくに関する調査としては、リクルートの「キャンパスセンサー」22号（1985年12月）に掲載されたものがある。調査対象は首都圏の無作為抽出の大学生約1,500人である。社会学者の宮台真司がその調査結果をさらに分析している。<sup>19</sup>

大学生をさまざまな要素によって、ライフスタイル別に5つの型に分類している。「ミーハー的普通人」、「アンバランスなスペシャリスト」、「先端的高感度人間」、「パンカラ風さわやか人間」、「ネクラ的ラガード（後れてきた者）」である。典型的な新人類が「ミーハー的普通人」、典型的なおたくが「アンバランスなスペシャリスト」である。

「ミーハー的普通人」は、「メディア性が高く、高度な対人能力をもち、異性志向が強い。付和雷同型でトレンドになびく。新人類の中核に相当すると考えられる」若者である。「アンバランスなスペシャリスト」は、「何かの極端なマニアである。その方面では高感度人間的であるが、その狭い分野に熱中するあまりに他の分野ではネクラ的ラガードになってしまっている」若者である。

「先端的高感度人間」は、「可処分所得が高く金持ち。高校デビュー組で遊び慣

れた高度の自信家。決まった少人数グループで行動し、付和雷同しない。トレンド発信源で、新人類の先端に相当する」若者である。「バンカラ風さわやかな人間」は、「勝ちたがりで、強い上昇志向があるが、メディア性が低くて、人情味に厚い。いわば有名大学体育会系に多い坊ちゃんタイプ」の若者である。「ネクラ的ラガード」は、「対人能力が極めて低く、得意分野が皆無で、内にこもって全く目立たない。いわば翼をもがれた『アンバランスなスペシャリスト』に相当する」若者である。

新人類とされる「ミーハー的普通人」が約半数を占める。おたくとされる「アンバランスなスペシャリスト」の構成比は約15%である。高度消費社会・情報化社会において、コミュニケーションスキルは若者のライフスタイルに大きく影響する。コミュニケーションスキルに長けた者にとって、学生生活は楽しく、自己実現は容易である。おたくは社交性を失った、またはそこから後退して鬱屈した想いをもつ者が多い。

## 9. 教祖麻原と幹部信者

オウム真理教の教祖麻原彰晃は1955年、熊本県八代に7人兄弟の4男として生まれた。父は畳職人であった。麻原の実家は非常に貧しかった。生まれながらに眼に障害をもっており、寄宿舎つきの盲学校に転校させられて親から棄てられたと思うようになる。麻原には名門大学を卒業して出世したい、政治家になって日本の指導者になりたいという希望や夢があった。大学受験に失敗、麻原は貧病争<sup>20</sup>の少年時代・青年時代を送る。

希望や夢という理想を捨てざるを得ないルサンチマン（挫折感、劣等感、怨恨）が麻原の人格形成に大きく影響している。その反面、強烈な自己愛もっていた。後に、反社会的・自己中心的行動となって現れる。そのような性格は

幹部信者のおたく性と強く呼応し合う。

30歳代の麻原は、自分の理想を棄てて新たな虚構の構築へ向かうことになる。自らの疎外状況から超現実的志向として超能力を求める。1984年、ヨーガ道場を開き、自らヨーガに没頭する。1985年、オカルト雑誌「ムー」や「トワイライトゾーン」に麻原の空中浮揚の写真や記事が掲載される。1986年、麻原は最初の著書「超能力秘密の開発法」を出版する。1987年の丹沢集中セミナーでは、殺人を容認する説法を行っている。同年、機関紙「マハーヤーナ」を創刊する。

超能力の獲得という虚構が、救世主気取り・革命家気取りによって、理想に反転する。その理想とは、国家に擬制したオウム真理教の省庁制の組織が、現実の国家体制に置き換わった世界である。1987年の説法や1990年の衆院選惨敗をターニングポイントにして、無差別テロへ突き進んでいく。理想の実現を待望していたのか、破滅を予期していたのか定かではない。<sup>21</sup>

教祖麻原にとって、教団組織上、有能な幹部信者を必要とした。それにとどまらず、麻原の理想の実現のためにはなくてはならぬ存在が幹部信者である。とくに、彼らの科学的知識や技術を最大限に利用した。そのために、麻原は幹部信者とは特別の関係をつくり上げていた。自分の手足として使えるように。したがって、幹部信者以外の信者については、オウム事件と切り離れた捉え方をしなければならない。在家信者の多くは、教祖麻原を優れたヨーガの指導者であると思っていた。オウム事件に関わった50名ほどの幹部信者は、他の信者と異なり、教祖麻原を最終解脱者であり現代のブッダであると濃淡の差はあれ信じていた。ヴァジラヤーナに従い、マハームドラーを実践していた。

1995年の地下鉄サリン事件の時、幹部信者の多くは30歳代前半であった。教祖麻原がモラトリアム世代であるのに対して、幹部信者は1980年代に青春時代を過ごした新人類世代である。総じて彼らの少年時代・青春時代は恵まれており、満ち足りた生活を送っていたようである。幹部信者には国立私立の名門大

学の理系の卒業生が多い。

しかし、1980年代の日本社会の時代状況を反映して、幹部信者が共通に抱いていたのは生きている実感に乏しい空虚感である。とくにバブル期の世相に嫌悪して、根が真面目な彼らは自分探しのために入信し修行おたくになる。新人類であった彼らは、1980年代後半にアンバランスなスペシャリストの道を選ぶ。それはかつて経験したことのない充実感を彼らに与えた。ヨーガによるクンダリーニー覚醒への修行プログラムに従って、解脱へのステージをクリアしていく。その変性意識状態である神秘体験が教祖麻原の教義を絶対視させ、麻原を最終解脱者にして、前世来世を見通す救世主と確信するに至る。

幹部信者がオウム真理教に入信し出家信者になる動機の共通性は、自己自身への探求や自我意識の変容による精神的・霊的覚醒を求めていたことである。自己中心的関心としての自己救済であり解脱である。そうした意味での自分探しおたくであり、修行おたくであり、宗教おたくであった。入信後には教祖麻原を、確実に解脱へ導いてくれるかけがえのない師であると確信する。

さらに教祖麻原の説教によってハルマゲドンによる世界の終末を、つまり人類の滅亡を阻止しようとする彼の遠大な使命感に感銘を受ける。自己の意識変革による社会変革という問題意識を幹部信者は共有することとなり、教祖麻原から人類救済の使命を授けられ、彼の世界に埋没していく。もちろん、教祖麻原を裏切れば殺されるという恐怖心は絶えず抱いていた。マハームドラーによって犯罪的ワークに関わったことのある幹部信者にとって、その思いは強烈であった。

## 10. オウム真理教とサブカルチャー

「オウム真理教のテキストはアニメやコミックである」、「オウム真理教の教

義はサブカルチャーの残骸のパッチワークにすぎない。週刊誌「AERA」のオウム特集(1995年4月24日)は、「オウムの共通言語はSFアニメだ」と指摘している。「オウム事件はおたくの連合赤軍である」と喝破した、若者のサブカルチャーに詳しい評論家の大塚英志は、オウム真理教の教義や教祖麻原の行動や思考の様式(手口)など、オウムを構成していたもの全体は1980年代的サブカルチャー事象からの引用であるという。とくにアニメ、コミックやニューアカデミズムからの拝借である<sup>22</sup>。

オウム真理教が度々使った「最終戦争」、「ハルマゲドン」、「救済」、「コスモクリーナー」、「地震兵器」、「細菌兵器」などの言葉は、1980年代の人気アニメやコミックの影響がある。とくに宇宙の悪と戦う戦士の活躍を描いたSFアニメである。また、教団の宣伝活動にアニメやコミックを多用したこともオウム真理教の大きな特徴である。

教祖麻原が最も熱中して読み、大きな影響を受けたと伝えられるものは、宗教学者の中沢新一の著作とアニメ作家の宮崎駿の作品である。前者は『虹の階梯—チベット密教の瞑想修行』(チベット密教論、密教の修行の場でグルである師が弟子である著者に与えた口頭伝授の模様を生き生きと描く。具体的な修行内容やグルと弟子の關係に教祖麻原は強い影響を受ける。)であり、後者は『風の谷のナウシカ』(「月刊アニメージュ」に1982年から1994年にかけて連載されたコミック、1984年にアニメになって公開される。文明と自然の対立や、人間中心主義のヒューマニズム、生命倫理などがテーマである<sup>23</sup>。)であった。また、最高幹部の村井秀夫はSF少年であり、多くの幹部信者はSFアニメ、コミックおたくであった。ある幹部信者は裁判の証言で、教祖麻原の指示にSFアニメを連想したと述べている。教団内の生活において、コミックは日常的に読まれていた。

1956年から1965年生まれの幹部信者にとっての共通体験は、若者のサブカル

チャーであったアニメやコミックである。その空想性・妄想性を現実として生きることになる。SFアニメ、コミックのテーマは、文明社会の破滅後の世界を描くことで平和な現代の虚構性を問うものであり、優れたメッセージ性があった。しかし、それは破滅や破滅後の世界そのものを受け入れる心性を一部の若者に浸透させていた。そして、教祖麻原の説教、「真理はオウム真理教のみにある」、「オウム真理教に敵対するものはすべて無間地獄に堕ちる」、「この世は汚れている」から「破滅させた方が世のため人のため」、「現代人を救うにはその生命を絶つしかない」<sup>24</sup>へ、幹部信者を簡単に超えさせてしまう。

1970年代末から1980年代の代表的アニメ、コミックは、「宇宙戦艦ヤマト」(1977年)、「未来少年コナン」(1977年)、「機動戦士ガンダム」(1979年)、「伝説巨神イデオン」(1980年)、「超時空要塞マクロス」(1982年)、「装甲騎兵ボトムズ」(1983年)、「幻魔大戦」(1983年)、「風の谷のナウシカ」(1984年)、「北斗の拳」(1984年)、「天空のラピュタ」(1986年)、「AKIRA」(1988年)などである。<sup>25</sup>

「宇宙戦艦ヤマト」から「幻魔大戦」まででは、宇宙規模での破滅(ハルマゲドン)そのものを描いているが、「風の谷のナウシカ」や「北斗の拳」、「AKIRA」などでは破滅後の再生や共同性がテーマになっている。1980年代後半になって、破滅を織り込み済みとして虚構と現実の境界が曖昧になっていく。とくに、子どもの頃から「ノストラダムスの大予言」に親しんできた幹部信者にとって、世紀末の破滅は現実味を帯びたものであった。

## 11. おわりに

オウム事件は、日本人の宗教観や宗教教団観、政治の保守化と経済の効率化、高度消費社会や情報化社会による虚構的現実の拡大、能力主義的競争社会、若



者の生き方や価値観、教団の教義や組織構造、教祖の挫折感や劣等感や怨念などが、相互に影響しあって作り上げた犯罪である。しかし、直接的原因は「カルト」と「おたく」が1980年代後半に会ったことではないだろうか。

1970年代末から1980年代にかけて、日本社会の政治的・経済的・社会的・文化的状況を背景にして、また現代日本社会特有の宗教状況を背景にして、新新宗教が教勢を拡大し、ある新新宗教は世紀末を控えてカルト教団に変貌していく。他方、1980年代の若者は、高度な消費社会や情報化社会の進展に呼応して新人類として姿を現し、その中から80年代後半にはおたくが登場し、若者のサブカルチャーの影響を強く受けることになる。教祖麻原彰晃と幹部信者は宗教おたく、修業おたくであり、SFアニメおたく、コミックおたくであった。

教祖麻原と幹部信者、お互いの積極的な人間関係がオウム事件を起こした。幹部信者は、最終解脱者であり霊的なカリスマ的権威をもつ現代のブッダと信じた教祖麻原に身も心も全面的に依存してしまった。教祖麻原と幹部信者の行動は当然に厳しく断罪されねばならない。また、彼らを生み出した社会、そして彼らが作り上げた共同幻想の実現のためのテロを許した社会にも大きな問題がある。その社会とは百年来の日本社会であり、1970年代後半以降の現代の日本社会である。

## 註

- 1 降幡賢一『オウム法廷』朝日新聞社、1998年2月—2004年4月まで朝日文庫15冊。江川紹子『「オウム真理教」裁判傍聴記①』『同②』文藝春秋、1996・1997年。江川紹子、『魂の虜囚』中央公論社、2000年。
- 2 林 郁夫『オウムと私』文藝春秋、2001年。
- 3 早川紀代秀・川村邦光『私にとってオウムとは何だったのか』ポプラ社、2005年。
- 4 村上春樹『約束された場所で』文藝春秋、1998年。他に、R・J・リフトン『終末と救済の幻想』岩波書店、2000年。高橋英利『オウムからの帰還』草思社、1996年。

カナリヤの会編『オウムをやめた私たち』岩波書店、2000年。

- 5 島田裕己『オウム』トランスビュー、2001年。オウム真理教の教義について、第2-4章参照。
- 6 秘密金剛乗について、麻原は説法集(『ヴァジラヤーナコース・教学のシステム教本』オウム真理教、1994年3月)の中で「ヴァジラヤーナ五仏の教え」として述べている。

五仏とは、ラトナサンバヴァ、アクショープヤ、アマターバ、アモーガシッティ、ヴァイローチャナのことで、原則的思考、つまり戒律であると麻原は述べている。

ラトナサンバヴァの法則では、真理を悟っている最終解脱者が決定すれば、この世のすべての物財を盗もうが、奪おうが、真理のための功德になるという。物財そのものに善や徳はなく、善や徳のためにつかえば功德になるからである。不倫盗戒に反するものである。

アクショープヤの法則は、すべての生命にとってどの時期に死ぬのが一番輪廻にとってプラスになるかという実践である。麻原は殺生を正当化する論理としてこれを用い、生きて悪業を積ませるよりも早く寿命を絶つべしと説く。いわゆるボアの論理である。不殺生戒に反するものである。

アマターバの法則は、伴侶や恋人への想いが真理の実践の妨げになっているなら、伴侶や恋人を奪ってよいということである。不邪淫戒に反するものである。

アモーガシッティの法則は、結果のために手段を選ぶ必要はないということである。人々を救済するためなら解脱者の行為はすべて許されることになる。ヴァイローチャナの法則について麻原は論じていない。

このヴァジラヤーナ五仏の教えの実践は、教祖麻原がすべてのカルマを見切っている、その能力をもつ最終解脱者であるということが基準になっている。
- 7 対馬路人・西山茂・島蘭進・白水寛子「新宗教における生命主義的救済観」『思想』665 岩波書店、1979年。
- 8 読売新聞社、1952年全国世論調査、10月22日(発表紙面、以下同様)、N2572(有効回答数、以下同様)。同、1965年世論調査「日本人のこころ——その生活感情と人生観」、1月1日、N2525。同、1969年世論調査「日本総点検」、10月16日、N3225。同、1979年全国世論調査「80年代への国民意識」、8月20日、N2176。同、1984年全国世論調査「80年代への国民意識の流れ」、8月20日、N2324。同、1989年国民意識定期調査「平成時代の日本人」、10月11日、N2179。同、1994年世論調査「宗教に関する国民意識」、7月3日、N2064。同、1998年世論調査「宗教観」、5月30日、

- N2015。同、2000年世論調査「宗教観」、3月2日、N1928。同、2001年世論調査「宗教観」、12月28日、N1899。同、2005年世論調査「宗教観」、9月2日、N1798。
- 9 朝日新聞社、1981年世論調査「宗教心と日本人」、5月5日(発表紙面、以下同様)、N2524(有効回答数、以下同様)。同、1995年「全国世論調査」、9月23日、N2290。
- 10 日本世論調査会、1995年「宗教世論調査」、7月9日(東京新聞掲載)、N2013(有効回答数)。
- 11 國學院大學21世紀COEプログラム、2004年「日本人の宗教団体への関与・認知・評価に関する世論調査」報告書、調査日10月8—11日、N1385(有効回答数)。
- 12 山折哲雄『宗教の話』朝日新聞社、1997年。
- 13 村上重良『天皇制国家と宗教』講談社、2007年、4頁。同、参照。

明治政府は天皇中心の神道の国民教化として、キリスト教や仏教の弾圧や民間諸宗教の取り締まりによって各宗教に対する統制支配を進める。それを象徴するのが明治3年、「大教宣布の詔」であり、「惟神之大道」を宣揚しての国民教化である。しかし、弾圧されていたキリスト教や仏教の信者信徒が神道国教化に全く無抵抗であったわけではない。政教分離の原則に反するという内外の批判や、欧米諸国の抗議に直面した政府は、キリスト教をある程度黙認する形で解禁せざるをえなかった。

また、廃仏毀釈や神仏合併布教に対する仏教側の抵抗運動も激しく、政府は信教の自由を否定することはできなかった。とくに不平等条約を改正するための外交上の必要から、欧米列強の圧力に屈してキリスト教も含めて信教の自由を認めざるをえなかった。しかし、国民の権利として信教の自由を認めたわけではない。なぜなら、教部省は信教の自由とは政府による宗教への恩恵的保護であるとし、その代償として各宗教に政府への奉仕を要求した。仏教はじめ各宗教は、護国の宗教としての役割をあてがわれることになる。

明治10年代に入ると、祭神論争を契機として、国教としての神社の特権的地位が確立される。つまり、神道における祭祀儀礼と宗教性を分離するという「祭祀と宗教の分離」によって、神社神道や皇室神道は国家の祭祀を行う非宗教の国家機関となる。いわば国家に直属する神道から宗教性を除くことで、非宗教的な祭祀の国家への統合は政教一致ではなくなる。ここに、そもそも神道を国教化する明治政府の近代化政策が、結果的に伝統的の神道の非宗教化を促進することになるのである。

明治期は、殖産興業・富国強兵をめざす近代化と、神社神道・皇室神道の復古化

が同時に進行し、宗教政策は変転を重ねる。明治22年、1889年に制定される皇室典範と大日本帝国憲法は、近代天皇制国家の基本法として天皇による統治を法的に決定した。大日本帝国憲法28条の信教の自由の規定は、政府が許容する限りでの自由であり、非宗教とされる国家神道はその対象外である。公認宗教である仏教やキリスト教、教派神道の上に国家神道が君臨する宗教体制が構築され、国家神道が全国民に強制されることになる。

国家の根本的特質である「国体の教義」の真髄こそ天皇中心の国家神道とされ、日清・日露戦争を経ての国家意識の高揚によって、国家神道は戦争遂行の軍国主義イデオロギーになっていく。この国体の教義を普及させる上で神社の果たした役割は大きい。明治末には、地方行政に神社が活用され、大正期には神社制度が大幅に整備されて、昭和に入ると軍国主義イデオロギーの普及教化の機関として、まさしく普及教化の場として機能する。

各宗教は国教としての神道の特権的地位に異議を申し立てるようになったが、政府は神社の性格を明確にすることなく、戦時体制に入ると各宗教への統制や弾圧を強化していく。むしろ、皇紀2600年（1940年、昭和15年）を期して、内務省神社局は神祇院に昇格し、国家神道は絶頂期を迎える。新宗教などによる若干の抵抗運動に対しては、不敬罪や治安維持法を発動して容赦なく弾圧する。仏教はじめ大半の宗教は政府の統制に屈し、戦争に協力し、国家神道を補完し、国民を戦争に駆り立てる役割を積極的に果たした。

- 14 前掲書、山折哲雄、21頁。
- 15 西山 茂「新しい新宗教の特徴と分類」『大法輪』（第57巻9号）大法輪閣、1990年。
- 16 櫻井義秀『「カルト」を問い直す』中央公論社、2005年。

オウム真理教の資産状況については、いくつかの資料がある。ここでは櫻井義秀がまとめたものを参照する。1996年、オウム真理教の破産が宣告された時、教団の負債額は約51億9千9百万円である。教団の資産の総額は、約10億4千百万円である。破産管財人は約9億6千万円を約2,100人の被害者に交付した。教団はその後、年間1億円相当を分割返済するとしている。

1996年から1999年（3年間）のオウム真理教の収支状況をまとめた資料によると、収入は約26億円、支出は約21億円である。収入の内訳は、パソコン販売、約16億、支部活動、約6億円、個人的労働、約4億円である。1年で約8億7千万円。出家信者一人当たり年間約133万円を稼いでいたことになる。支出は、出家信者の居住施設

費と生活費である。他に裁判の費用を考慮すると、収支は大幅な赤字になる。

2000年のオウム真理教の団体資産総額は1億円にも満たない。2003年、教団名を「アーレフ」に変更し、その後組織が二分化しており、被害者への確実な返済は危うい。

オウム真理教の地下鉄サリン事件(1995年3月)以前の信者数は、出家信者が1,600人ほど、在家信者が15,000人ほどである。2000年には約十分の一になり、今日さらに減少しているといわれている。しかし、1990年から1995年のオウム真理教の最盛期には、年間20億近い収益を上げていたと思われる。事業収益としては、書籍販売(教祖麻原彰晃の著作)、各種イニシエーション(100万円や1,000万円の電極付きヘッドギア・コースなど)、布施(拉致監禁で死亡した仮谷さんの妹から6,000万円など)、出家信者の持ち込む資産、裁判での和解金(波野村から9億2,000万円)などがある。1986年から1995年の10年間で100億円を超える資金を調達していた。

17 小谷 敏編『若者論を読む』世界思想社、1993年。

18 『朝日ジャーナル』「新人類の旗手たち」の登場者を列記する。

遠藤雅伸、中森明夫、小曾根真、木佐貫邦子、原律子、吉川洋一郎、原田大三郎、甲田益也子、川西蘭、加藤かおる、手塚真、高見裕一、李泰榮、尾崎豊、辻本清美、三好和義、安西英明、三上晴子、泉麻人、北村信彦、高野生・大、とんねるず、野々村文宏、川村毅、萬處雅子、小野寺紳、今井アレクサンドル、桜井さとみ、樋口尚文、結城恭介、秋元康、滝田洋二郎、藤原ヒロシ、西和彦、洞口依子、平田オリザらである。

大塚英志『「おたく」の精神史』講談社、2004年。

大塚英志によれば、中森明夫が「おたく」という言葉を用い始めた1983年頃、「新人類」との差異が当事者においても一般的にも明確に意識されていたわけではない。しかし、おたくの性格がその存在の形成過程から一変して決定的な負のイメージをもってしまったのは、M事件である。

新人類は1980年代の高度消費社会・情報化社会の到来に、商品選択能力をもつ積極的で主体的な消費者として登場する。その商品の多くは、高度消費社会・情報化社会を牽引した団塊の世代の人々が1980年代のメジャーな資本と結びついて作りだしたものである。積極的で主体的とはいえ消費は本来受動的な営みであり、喚起された欲望に応える商品は思想やファッション、雑誌、音楽など、すべて提供されたものである。

一方、おたくはコミックマーケットが象徴するように、彼らが欲する商品（もっぱらコミック周辺に集中する）は経済システムの埒外にあり、自前の商品や市場を必要としていた。つまり、新人類の領域からはみだし、おたく自らが商品や市場を形成しようとする自給自足的で貪欲な生産者であり消費者であった。そのような商品や市場は、団塊の世代とは異なり、資本と結びつかない新人類の中のおたくが関わり始めた領域である。むしろ、出自として新人類は受動的に形成され、おたくは能動的に形成された。当初おたくの創造力が資本と結びつく余地はなかった。

高度消費社会・情報化社会の新たな担い手で、開かれたコミュニケーション状況を生きる新人類に対して、おたくはアンバランスでマニアックなスペシャリストで、閉鎖的なコミュニケーション状況を生きるという負のイメージを決定づけたのは、1989年に起きたM事件である。幼女連続誘拐殺人事件の犯人である彼の自宅自室から、数千巻ものホラービデオやアニメが見つかり、ホラーおたく、アニメおたくであったことが判明したからである。また、彼は手に障害があり自閉の性格であった。また、彼の性倒錯的な犯罪とおたく性が結びつけられてしまったのである。

蛇足になるが、M事件を論じるうえで重要な要素は1980年代の性文化である。1980年代は、性の情報化・商品化が革命的に進んだ時代である。マイナーな若者のサブカルチャーが量的にも質的にも激変し、1990年代には日本文化を代表するひとつにすらなった。それを象徴するのがアダルトビデオの社会化現象であり、日本のアニメ、コミックの国際化現象である。

大平健のいう「豊かさの病理」、上野千鶴子のいう「消費による自己実現」は1980年代の若者のサブカルチャーを特徴づけている。それは1990年代のグロテスクなオウム事件につながっている。豊かな社会では欲望が肥大化し、若者は性的自己充足を求め、他者の存在や視線を無視し、身勝手な自己実現へ暴走する。さらに、オウム真理教のように、豊かな社会は過剰な虚構で自己を支えるような若者を生み出す。

19 宮台真司「新人類とオタクの世紀末を解く」・「同(統)」『中央公論』1990年10月号・11月号。

宮台真司によれば、新人類文化とおたく文化はリーダー部分では融合していたが、フォロワーの増大につれて人格類型の違いと重なるようにして分化していくプロセスがある。それは1970年代後半から1980年代にかけて、新人類的なものがメディア上を席卷していくのに合わせて進んでいった。つまり、おたく文化のリーダー部分（新人類でもある部分）によるフォロワー部分への差異化の試みがなされた。おた

くを狭い趣味の領域に分断する「おたく差別」によって。

20 藤原新也『黄泉の犬』文藝春秋、2006年。

写真家でエッセイストの藤原新也は、オウム真理教教祖の麻原彰晃の生い立ちについて注目すべき考察を加えている。

1995年、オウム事件の全容が明らかになった頃、藤原新也は麻原の長兄松本満弘に会って貴重な話を聞き、記している。松本満弘は麻原の出生や生い立ち、オウム真理教の成り立ちを最もよく知りうる人である。彼は全盲で、地元で鍼灸院を営んでいた。評判の高い名治療師として人望を集めていたが、地下鉄サリン事件後、大阪の郊外に身を隠すように暮らしていた。彼は麻原が「オウム神仙の会」を設立した時に教祖になってほしいと頼まれている。麻原は彼を尊敬し敬愛していたのである。麻原は彼から漢方やマッサージ、鍼灸について指導を受けていた。松本満弘は一家のリーダーとして松本家を差配していた。

松本満弘との対話や藤原新也独自の取材活動によって彼が注目する点は、水俣病と麻原の眼の傷害の関係である。また、麻原の特異な性格、麻原固有の精神病理である誇大妄想癖との関係である。さらには麻原の歪んだ国家社会への怨念との関係である。

詳しくは『黄泉の犬』にある。ここでは要点のみ記す。

水俣と八代は30キロほど離れているが、八代の人で水俣病患者として認定された人は数名いる。認定されなかった人は40数名である。藤原新也は、熊本県庁水俣病対策課で確認している。松本満弘の話では、松本家では水俣湾で採れた魚介類(ジャコ)をよく食べていた。彼は弟の麻原を水俣病患者として申請したと述べている。認定されなかったが、申請者は地元ではアカであるとみられて暮らしにくいのでそれ以上は争わなかったという。障害者であるということと既に差別されていたこともあったと。

藤原新也は水俣病が原因で眼に傷害がでる可能性を、専門家の取材から確かめている。松本満弘は自分を含め兄弟に眼の傷害者が多いのは、水俣病に原因があるのではと考えていた。兄弟が通っていた地元の盲学校には、水俣湾の水銀で視野狭窄を患った子どもがたくさんいた。麻原は重度の視野狭窄であったが、子どもの頃は片目の狭い一点のみ見えていたらしい。オウム真理教で教団活動をする頃には、ほとんど見えなくなっていた。

未認定者のなかに麻原がいるという確証を藤原新也は得ていない。県庁の対策課

は認定者・未認定者の公表を拒んでいる。患者たちがいわれのない迫害や誹謗中傷を受けていることもあり、水俣病に関する事項はマル秘扱いになっているためである。

麻原が水俣病患者であったかどうかは明らかではないが、麻原自身がそう思っていた可能性は高い。障害者としての挫折感と劣等感と、水俣病の被害者意識とが社会や国家に対する怨念を異常に肥大させ強化させたと考えられる。サリンによって国家の転覆を企てるまでに。

麻原は盲学校に入学してから、ファンタジーや空想的劇画を好んで見る少年であった。閉鎖的な生活環境において、心身ともに鬱屈した状況で、麻原は内向的な抽象的思考の中で彷徨する性癖があった。麻原が後にインドのヨーガから出発してチベット密教を経て、キリスト教のヨハネの黙示録へと至る支離滅裂な信仰過程は、麻原の性癖から推察できる。藤原新也のいう麻原の精神病的誇大妄想は、青少年時代に既に形成されていたといえる。

麻原が松本満弘との対話で注目したもう一点は、彼と麻原の宗教家としての能力である。松本満弘はマッサージ師として、全盛期には1日に300人の患者を毎日診たというほどで、一時は地元八代のみならず九州各地からの患者を診ていた。そのテクニックはマッサージ師の領域を超えて、患者の患部に手を当てるだけで治療を施すものであり、多くの患者の病を治癒している。既に宗教的であったといえる。

麻原のオウム真理教におけるイニシエーション行為は、松本満弘のテクニックをまねたか受け継いだものである。麻原にもそうした能力があったと思われる。一介のマッサージ師が誇大妄想癖によって宗教家になっていく道筋が見えてくる。

- 21 大澤真幸『虚構の時代の果て——オウムと世界最終戦争』筑摩書房、1996年。

大澤真幸は、理想と虚構、虚構と現実という分析枠組みでオウム事件を考察している。

- 22 前掲書、大塚英志、24章参照。

- 23 夏目房之介『マンガと「戦争」』講談社、1997年、134—135頁。

アニメ版『風の谷のナウシカ』は以下のような内容である。「物語は産業文明の絶頂期の『火の七日間』と呼ばれる戦争によって破滅した世界に始まる。人間にとって有害な『瘴気』（毒ガス）をばらまく『腐海』とよばれる菌糸類の森の拡大や、そこに棲息する奇怪な生物たちの進出によって、人類の住める土地は日に日に狭められてゆく。風の谷とよばれる平和な小国の王女ナウシカを主人公に、その世界で始



まる戦争が描かれる。戦争は大国同士のものだが、小国も戦争に荷担していかねばならない。

ナウシカは戦士として参戦するが、次第に腐海の謎に迫り、それが汚れを浄化する生態系的システムであることを知る。が、大国はその浄化システムのシンボルである巨大な虫(王蟲)であるオウムを戦争に利用し、さらに文明を破壊させた巨大な生物兵器(巨神兵)を再生して戦争に勝とうとする。ナウシカは王蟲を救おうと命をなげだして戦争を止め、伝説に語られた『青き衣の者』として平和をもたらす。最後には腐海の奥の浄化された土地に、みずみずしい植物が育つ映像が希望を暗示して終わる。」

長編の原作コミックでは、物語の構成は非常に複雑で、登場人物も多い。さまざまな国や都市、国をもたない部族、森の中で生きる人々など、世界の多面的描写が戦闘場面と交互に描かれる。

前掲書、大澤真幸、296—297頁。

大澤真幸は、『風の谷のナウシカ』とオウム真理教は多くの点で世界観を共有しているという。「ナウシカでは、毒ガスによって汚染されたこの世界を浄化することが主題になっている。この毒ガスがオウム真理教にとってのサリンと類似的な両義性をもつ。最後にナウシカは浄化の神に出会う。しかし、ナウシカはこの浄化の神を拒否する。長い間、『腐海』(毒ガス)と共存してきた人類の身体は、すでに汚染にある程度適応してしまっている。にもかかわらず、大気を浄化することによって人類を救済しようとすれば、逆にかえって人類を滅ぼすことになるのであり、したがって、その『救済』は完全に欺瞞だ、というのだ。こうして、毒ガス=他者との共存が、ここでも選ばれるのだ。」

宮崎作品では異質な他者との共存が主題である。オウム真理教ではサリンによって攻撃されている(被害者意識)という捏造を楯子にサリン攻撃にでる。教祖麻原の子どもの頃からの怨念である被害者意識が加害者意識に転換する。ナウシカでは、「腐海」や「王蟲」が汚染するものであると同時に浄化するものであるという両義性をもっている。しかし、この両義性を止揚した完全な浄化を最終的救済として描くことはない。両義性を引き受けて生きるしかないというのが、宮崎駿の結論であると考えられる。人間が生きているという現実被害と加害は避けられず、教祖麻原や幹部信者が被害者意識と加害者意識をともに引き受けていれば、オウム真理教は異なる展開をしていたと思われる。

24 前掲書, 林 郁夫 502—523頁。

林 郁夫は慶応大学医学部出身の心臓外科医で、1977年に新新宗教である阿含宗の信者になり、1989年オウム真理教に入信し、翌年出家信者になる。オウム真理教の幹部信者として地下鉄サリン事件でサリンをまき逮捕され、裁判で無期懲役が確定している。彼は手記『オウムと私』のなかで地下鉄サリン事件に関わった時の心境を述べている。それは事件に関わった他の幹部信者たちの心理状態を同様に物語るものである。

1995年の1月に読売新聞はオウム真理教の施設付近からサリン残留物が検出されたと報道し、教祖麻原が警察による強制捜査を恐れ、そのホコ先をそらせるためにサリンをまかせたのが地下鉄サリン事件である。

「強制捜査のホコ先をそらせば、オウムが守られて、真理が途絶えないですむのだから、サリンで殺され、ポアされることになった人たちも、真理を守るという功德を積むことになるので、誰であろうと、殺された人は最終解脱者・麻原によって、高い世界に転生させられて、真理を实践できるようになるのだ。だれも無駄死にということにはならないのだ。……

いまから思うと、結局、あくまで麻原が最終解脱者であり、すべてのカルマを見切り、ポアをしてくれると信じることに、私のさまざまな思いは収束していったのです。実行を前提にして生じる葛藤を、教義で理由づけて『麻原への信』にすぎりついていくしかないという心理状態になってしまっていたのです。……

真理を守るためなら死ねる、人類を救うためになら死ねる、というこの言葉の解釈を、『真理を守るために』ということだけに短絡させて、私の行為で死んでいくことになる人たちを『真理を守るための死』として容認しようという、『錯誤』が、このときの私にはありました。……

葛藤の末に得た結論が、結局麻原がすべてを見切っている、麻原がポアしてくれる、ということに収束してしまったということも、慙愧の念に堪えませんが、当時の私のもっていた価値観においては、当然の流れであり、当然の帰結であったのだと思います。

心の中にいったん形づくられた『価値観』を超えるには、その人間の住んでいる社会、生きているその世界を変えてしまう必要があるということなのではないでしょうか。私が当時、私の住んでいた社会（オウム）の『価値観』に従って思考し、行動したということは揺るがしのない事実なのです。……

オウムでも『真の愛・真の哀れみ』を心に抱いていれば、『ボア』と称した殺人すら肯定しうるのだという心理が実際に存在していたのです。いまから考えてみると、オウムの犯罪の背景には、かならずこの『真の愛・真の哀れみ』にすがりついて犯罪を正当化せざるをえなかったサマナ（出家信者）の心理があったということなのです。麻原はそれを利用し、絶対的な権威を詐称し、装ったところが問題だと思います。……

サマナにとっては、オウムは出家制度をとるひとつの別の社会でした。そのオウムに対して麻原は、『陰の組織』が支配する現代社会という仮想の社会を作り上げ、『社会』と『社会』の戦いという考え方をサマナと信徒に浸透させたのです。そして、『陰の組織』と『日本国家』とをリンクさせ、『オウム対国家』という戦いの構図を成立させました。この時点で、麻原が指示さえ出せば戦いを実行する集団社会イコール『オウム』が、麻原の思惑どおりにできあがったのです。……

行動原理としての『ボア』は、戦いを行うときに不可欠の大義名分の役割を担い、サマナたちに対してその機能を果たしたのです。『ボア』は輪廻転生の考え方を根底におき、人の死は魂の死ではないのだという理由の上に成り立っています。人を殺すことを、魂を転生させるということに置き換えることで、殺人に対する抵抗感を弱められたということも感じます。そこにすがりつきたいという思いだったのかもかもしれません。そしてオウムが現代社会に向けて仕かけた戦い、無差別の殺人行為が、松本サリン事件や地下鉄サリン事件だったのだと思います。」

前掲書、早川紀代秀・川村邦光、153—4頁・210—216頁。

早川紀代秀は大阪府立大学の大学院を終了後、ゼネコンに就職、一級造園施工管理技師や一級土木施工管理技師の資格を得て都市計画の会社の取締役に転じている。1986年に「オウム神仙の会」に入会、翌年出家している。オウム真理教の最高幹部として教祖麻原の指揮の下、武装化を進める。坂本堤弁護士一家殺害事件の実行犯のひとりで、死刑判決を受けている。その事件の時の心境を手記で述べている。

「当時の私は、グル（教祖麻原）をブッダであると信じきっており、ボア即ち殺害はその人を救済するためであるという教義を信じていたのと、自分の心の中に躊躇の気持ちが生じて、それは修行が足りないからであり、克服すべきものであると抑えこんでしまっていたからでした。……

こうした思考習慣は、信徒時代から始まり、出家後、徹底的に行われたグルの課題を克服していく訓練を通じて形成されていったと思います。ちょうど軍隊では上

官の命令に無条件に従う習慣が形成されるように、オウムにおいては、グル麻原の命令には無条件に従う習慣が形成されていったといえます。」

また、早川紀代秀は獄中でオウム事件を反省して次のように述べている。

「グルを絶対視し、グルに絶対服従することによって絶対自由を獲得していく道が、グルイズムといわれるものですが、それはヨーガやチベット密教の伝統の中に多かれ少なかれ認められるものです。……

オウムの誤りは、……グル麻原が自分は人類のカルマを清算する地球規模の救世主であるという救世主幻想とでもいうべきグル幻想（グルのグル幻想）をいただき、それを私たちも共有してしまったこと（弟子のグル幻想）、これがオウムの間違いの根本ではなかったかと思えます。……

オウム事件は、どんな気狂いじみたことであっても、それはグルの宗教的動機から起こっていったということ、そしてグルへの絶対的帰依を实践するというグルと弟子の宗教的關係性によって、弟子がグルの具体的な指示、命令に従って事件を起こしていったということ……こうしたグルと弟子の宗教的關係性の中に私がとらわれ、事件の実行犯となったのは、自分自身の傲慢さと宗教的無知ゆえであったということを中心に反省し、重ねておわびします。」

25 前掲書、大塚英志。

1970年代後半から1980年代の若者のサブカルチャー、とくにアニメ、コミックの流行は、新人類やおたくの登場と大きく関係している。つまり、1970年代における政治の保守化と経済的豊かさは、若者の政治的関心を失わせ、社会への関わりが消費行動に転化して新人類やおたくを生み出していく。

そこで、1970年代末から1980年代のアニメ、コミックとオウム真理教の關係について、注目すべきはアニメ、コミックと教祖麻原に共通する世界観である。

大塚英志によれば、おたくの最大の特徴はサブカルチャーにおける過剰な読みにある。虚構の世界を現実世界と同等の構造や機能で成り立っていると見なす思考と、それを出発点とする想像力のあり方こそがおたくのおたくたる所以である。たとえば、サザエさんを正確に読み込めばトイレは10数か所あるはずであるという思考や想像力である。細部の整合性を語るにすぎない思考と想像力である。

1970年代後半から1980年代のアニメ、コミックの代表作である「宇宙戦艦ヤマト」や「機動戦士ガンダム」は、作り手が確信犯的にアニメの中に現実的背景を構築しようと試み、成功した最初の頃の作品であるといわれている。読み手の側の欲求に

応える形で「宇宙戦艦ヤマト」や「機動戦士ガンダム」は作品の内側の虚構世界が拡大され、壮大な物語、つまり作りものの歴史を含んでいる。1980年代に入って、このようなアニメ、コミックの作り方が一般化していく。教祖麻原が愛読した「風の谷のナウシカ」しかりであり、「AKIRA」しかりであり、最たるものは「新世紀エヴァンゲリオン」(1995年放送開始)である。

アニメ、コミックと教祖麻原に共通する世界観とは、虚構世界を仮想現実化するための具体的な情報の全体像である。この小論の始めに述べたように、オウム真理教の教義はシヴァ神を主神とし、ヨーガ、ヒンドゥー教、原始仏教、チベット密教を土台とし、ハルマゲドンや終末思想、ニューエイジ思想などを取り込んだ折衷主義である。それぞれ微にいり細にいり知識や情報を集め、学術的ですらある。教祖麻原の教説には、一部の宗教学者がだまされるほどの情報量による世界観、全体像が述べられていた。

1980年代のサブカルチャーの世界観は、現実世界の歴史から仮想世界の作りものの歴史へ逃避したものである。そこにおたく文化の本質がある。さらに、一部のおたくはオウム真理教の教祖麻原や幹部信者のように、虚構の中の歴史に満足できず、虚構を虚構のままにとどめておけず、現実の中に安易に虚構の実現をはかってしまったのである。

1990年代以降、虚構と現実の区別がつかなくなった青少年による犯罪が増加する。そこには、1980年代のアニメやコミックなど若者のサブカルチャーの影響が感じられる。オウム事件はその最大の犯罪である。